

Ⅲ. アクティブ・ラーニングの普及

1. 専門教育における実践事例の共有

1-1. AP シンポジウム（アクティブ・ラーニング）

1) 概要

本シンポジウムは、初年次教育プログラム「SIH 道場」で導入されたアクティブ・ラーニングの取り組みを、学士課程全般に浸透させていくことを目指して実施された。また、本年度のシンポジウムは議論のさらなる深まりを狙って、徳島県下の FD ネットワーク（T-SPOD）加盟校における FD 活動の成果と教育実践の先駆的な取り組みを共有することを目指し、同じく「アクティブ・ラーニング」をテーマとしている、「大学教育カンファレンス in 徳島」ラウンドテーブルと合同で実施した。シンポジウムでは、徳島大学総合教育センター教育改革推進部門助教の川瀬和也が司会を務め、徳島大学ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部准教授の行實鉄平氏、同准教授の小田切康彦氏、同医歯薬学研究部准教授の岡久玲子氏、ならびに T-SPOD 加盟校である阿南工業高等専門学校創造技術工学科教授の坪井泰士氏の 4 名による話題提供の後、会場を交えたディスカッションを実施した。

以下ではまず、プログラムの主旨と各提題者による提題の内容を記すことでプログラムの詳細を示し、その後、実際に行われたシンポジウムの様子を報告する。

2) プログラムの詳細

2.1) 本シンポジウムの主旨

アクティブ・ラーニングは、大学における伝統的な教授方法であった、一方向的な講義による知識伝達に代わる教授方法として注目を集めている。徳島大学は、文部科学省が推進する「大学教育再生加速プログラム（AP）」のうち、テーマ I「アクティブ・ラーニング」の取り組みに選定され、「学生と教員が共に成長する「SIH 道場—アクティブ・ラーニング入門—」」を軸に、アクティブ・ラーニングの手法を用いた教育の推進を行っている。本学の AP の取り組みは、「鉄は熱いうちに打て」（SIH：Strike while the Iron is Hot）の精神に則り、反転授業、グループワーク、学修ポートフォリオ、専門領域早期体験等によるリフレクションを基盤としたアクティブ・ラーニングの体験を通して、学生と教員が共に学び合い成長する教育プログラムである「SIH 道場—アクティブ・ラーニング入門—」を、初年次に導入するとともに、学年進行に伴い、アクティブ・ラーニングの実質化を学士課程全般に浸透させていくというものである。本シンポジウムは、AP の取り組みの一環として、本年度より初年次教育プログラムとして導入された「SIH 道場」でのアクティブ・ラーニングの実践を専門教育にも波及・浸透させることを目的としている。

また、本シンポジウムは、T-SPOD ラウンドテーブルと合同で実施される。T-SPOD ラウンドテーブルは、徳島県下の FD ネットワーク（T-SPOD）加盟校における FD 活動の成果と教育実践の先駆的な取り組みを共有し、高等教育の質的向上に向けた努力の成果を確認するためのものである。今回は、ラウンドテーブルのテーマを「アクティブ・ラーニングの取り組み」とし、本学 AP と目的が一致していることから、合同で実施する。

一口に「アクティブ・ラーニング」と言っても、そこには様々な教授・学習方法が含まれる。

徳島大学では、アクティブ・ラーニングを「教員による一方向的な知識伝達とは異なり、課題演習、質疑応答、振り返り、グループワーク、ディスカッション、プレゼンテーション等を取り入れることにより、学生自らが考え抜くことを教員が促し、学生の能動的な学習を促進させる双方向の教授・学修のこと」と定義し、その導入を推進している。このような多様な教授・学修方法を含むアクティブ・ラーニングを実際に授業に取り入れるためには、他の教員の実践を知り、その成果を共有し、またそれをもとに、各教員が自らの授業においてどのような形での実践が可能かを考え、相互に意見を交換することが重要である。

以上の観点から、AP シンポジウムとラウンドテーブルでは、徳島大学より 3 名、また T-SPOD 加盟校の阿南工業高等専門学校より 1 名の教員が提題者となり、授業実践の事例を発表することとする。また、この発表をもとに、意見交換を行う。これを通じて、「自分の授業にアクティブ・ラーニングを取り入れるにはどうすればよいか？」という観点から、フロアも含めた参加者一人一人が、発表された事例について考えられるようなシンポジウムを実施したい。

以下では、徳島大学に所属する 2 名の教員の提題内容について、簡単に紹介する。なお、T-SPOD より参加した坪井泰士氏の提題は、講義 VTR の事前視聴を踏まえたアクティブ・ラーニングの成果および具体的な実施方法に関するものであった。

2.2) プロサッカーチームを活用した実践事例

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 行實鉄平)

本授業は、プロサッカーチーム（徳島ヴォルティス）での体験学習（試合運営サポート活動）を通して「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を養うことを目的としたもので、今回、その学習をより深く確実なものにしていくために、e ラーニングやルーブリックといった学習ツールの活用やアクティブ・ラーニングの観点を意識した授業展開に挑戦した実践事例である。

本授業の履修者は、人文科学系学生 28 名（1 年生 15 名、3 年生 13 名）。体験学習は、チームの試合運営サポート活動を 8 グループ（3～4 人）に分かれて 3 段階構成（①ホップ：業務内容を知る、②ステップ：接客対応を知る、③ジャンプ：企画運営にチャレンジする）で実施した。また、この体験活動の前後には、教員やチームスタッフが体験学習の充実およびリフレクション時の概念化に必要な内容に関する講義を行った。さらに、②と③の間にはグループワークやプレゼンの機会を取り入れ、学生同士の共同学習を促した。

2.3) アクティブ・ラーニングを通じた政策コンペティションの実践

(徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 小田切康彦)

本報告は、徳島大学総合科学部の専門科目「公共政策学 I」において導入したコンペティション授業について取り上げる。当授業は、社会問題の解決策である公共政策の実態について理解することを目的としたものである。この授業の中で、受講学生がコンペを通じて実際に徳島県へ政策提言を行うという取り組みを実施した。具体的には、まず、受講学生のグループ分けを行い、徳島県が意見募集を行った県の総合計画・ビジョン案について検討した。続いて、グループごと

に意見の発表を行い、全体で共有した。そして、提案された意見の中から実現可能性のあるものを抽出し、政策提言として県へ提出した。このコンペは、討議を通じて実際の社会とのつながりを体験するものであり、受講学生の授業へのモチベーション、内容理解の向上等に寄与したと考えられる。

2.4) 職場巡視体験演習を通した看護大学生の学び

(徳島大学大学院医歯薬学研究部 岡久玲子)

看護学専攻3年生を対象とした専門科目『産業保健・看護論』の「職場巡視」の単元において、講義とその後のグループ体験演習を組み合わせた授業を実施し、学生の学びについて検討したので報告する。本単元の到達目標は、「職場巡視」の意義・目的、方法について理解することであり、まず、講義形式で、「職場巡視」の意義・目的および方法について教授し(1コマ60分、事例活用)、翌週、グループによる職場巡視体験演習を行った。学生はグループごとに指定された場所(学内)で職場巡視を行い、よい点はどこか、安全・衛生等に問題はないか、ポイントを話し合いながら記録用紙にメモをとった。その後、教室に戻り、各グループの代表者が気づいた点を発表し、教員は、一つひとつの発表ごとにフィードバックを行った(手順の説明5分、職場巡視25分、記録の整理・発表者の確定10分、学生による発表20分)。グループごとに異なる気づきがあり、全体で共有することで、多角的視点から見ることや他者の多様な感じ方から学ぶ姿勢を醸成した。また、講義の後に体験学習させることで、学んだ知識に基づき主体的に考え、理解を深めることができたと考える。

3) 当日のディスカッション

当日は、意見交換を促進するため、ある程度構造化された仕方でのディスカッションを実施した。まず、各発表者の提題に先立って、有益だと感じたこと、印象に残ったこと(!: Exclamation)と、疑問に思ったこと(? : Question)を書き留めるための「EQメモシート」をフロアの参加者全員に配布した。また、フロアの参加者に画用紙とマーカーを配布し、特に質問したいことを画用紙に書き出してもらうようにした。その後、この画用紙を会場前方の黒板上で分類・整理して、これらをもとにディスカッションを行った。

ディスカッションにおいては、アクティブ・ラーニング型授業において目標設定と評価をどのように効果的に実施するか、準備にかかるコストと学生の学習効果との関係という意味でのコスト・パフォーマンスをどう考えるか、予習・復習時間を確保するためにはどのような工夫が必要か、学外の機関と連携した取り組みの際にはどのような工夫が必要か等の点についての意見交換がなされた。

評価方法については、学生による相互評価の質をどのように保証するかという点が問題になった。これについては、ルーブリックを活用することで一定の客観性を担保するといった対策が共有された。しかし、客観性を高めたとしても、成績評価の際には学生間に利益相反が発生する可能性があるため、より慎重な運用が必要であることも指摘された。

今回のシンポジウムの提題は、プロサッカーチームとの連携、実際のパブリックコメントの送付、病院での実習といった、教室内にとどまらない学内外の組織との連携を含むものが多数あ

たため、連携に関する議論は実り多いものとなった。こうした授業方法は、実際の社会とのかかわりを持たせることで学生が将来像を描きやすくなるほか、授業の取り組みへの動機づけが向上する効果が期待される。しかし一方で、教員は調整等の負担を強いられることにもなるとの意見もあった。

4) まとめ

シンポジウムは盛会であり、アクティブ・ラーニング型授業を普及させるための取り組みとして一定の成功を収めた。4人の教員による多彩な取り組みが報告されたことで、様々な背景をもつフロア参加者にとっても得るところの多いシンポジウムとなった。また、一部構造化されたディスカッションも功を奏し、意見交換が促進された。

さらなるアクティブ・ラーニングの普及支援のためには、シンポジウムの場でなされた議論を、日常の教育活動支援へと還流させてゆくことが重要である。ディスカッションの中で、相互評価の問題点については、相互評価は直接の成績評価に用いるのではなく、学期途中で学生にフィードバックを与えてその後の学修の方向付けをするための形成的評価として位置づけることが有用であるように思われる。こういった点を踏まえて、単にルーブリック案の提供や作成支援だけでなく、活用方法にまで踏み込んだ支援も有効となろう。また、高い学習効果の実現とその準備のための負担とのバランスの問題を解決するため、特に学習効果が高いと思われる取組について、負担軽減のために重点的に支援してゆくような仕組みを構築してゆくことも有効であるように思われる。

1-2. AP シンポジウム（反転授業）

1) 報告概要

2016年1月6日に開催された「大学教育カンファレンス in 徳島」の中の「AP シンポジウム」の一環として反転授業の実践に関するワークショップをおこなった。本ワークショップは、参加者と発表者の間で、活発な議論が繰り広げられた。ワークショップの開催によって、参加者間で反転授業に関する重要な知見が共有され、新たな実践の開始に資するものと考えられる。

2) ディスカッションのまとめ

2016年1月6日、「AP シンポジウム」の中で『「反転授業」をやってみたー2014年からの実践を通してー』のセッションを開いた。本セッションには、約50名の参加者があった。本セッションでは、参加者と本学で反転授業を実践した教員6名が一丸となって議論を進めた。

『「反転授業」をやってみたー2014年からの実践を通してー』のセッションは、ワークショップ形式で進めた。本ワークショップでは、まず、趣旨説明をおこなった。趣旨説明は、2014年度の反転授業の実践のアウトラインについての概要を示した。また、反転授業の実践を、参加者に呼びかけた。

次に、反転授業に取り組んだ6名の教員によるポスター形式の発表をおこなった。実践の報告を、ポスター形式とすることで、参加者は実践した教員に直接疑問をおこなうことができた。参加者は、各発表者の実践報告に熱心に耳を傾け、活発な議論をおこなった。本セッションの参加者から集めたアンケートによると、ポスターによる発表から、「反転授業の理解が深まるとともに、対面授業の種々な取りくみがわかりました。」「いくつかのタイプの実例について、実施的な部分を知ることができ、参考になりました。」等の意見があった。

ポスター発表の後、発表した6名の教員を中心に参加者を交えた全体討議、パネルディスカッションをおこなった。パネルディスカッションの最初に質問票による質問を集め、フロアからの質問に答える形でパネルディスカッションを進めた。幾つかの質問が集まった。「事前準備は何をしたか?」という質問に対しては、「ビデオ20分程度+自前のテキスト」「ビデオは無しで自前の資料+クイズ」「小レポート」など、実践した教員から多様なコンテンツを用意し、対面授業に望んだことが報告された。また、「学生は本当に事前学習をしてくるのか? してこない学生への対応は?」という質問に対しては、予想以上の学生(8割~ほぼ全員)が事前学習をしてくることが明らかにされた。しかし、併せて、事前学習をしてくる学生がゼロになることもないので、授業中にTAがフォローする、本人任せ(大人の対応をする、やってこなくて困るのは学生自身)といった意見も出された。さらに、反転授業の効果に関する質問が寄せられた。現状では、反転授業の実践の普及が注目される段階だといえるが、今後、学習の質が問われることになるという意見が出された。学習の質に対する疑問に答えるため、評価方法の検討と開発を進める必要があることが、参加者全体で共有された。

なお、当日の本セッションの様子は、以下のWebサイトでも公開している。

<http://uls01.ulc.tokushima-u.ac.jp/info/Flipped/case/workshop2015.html>